

国際耕種の「円環型」新ビジョン

国内の経験を海外へ、海外の経験を国内へ

国際耕種は、5 年前の 2019 年に世代交代を果たし、新体制での運営に移行しています。そのなかで創業以来からの基本姿勢として、「現場からの発想」、「対話と協働」、「連携の促進」の 3 つを大切に引き継いでいます。このたび 40 周年を契機にウェブサイトのリニューアルや記念誌の作成に取り組みました。さらに、これからも国際耕種らしく力強く未来に向かってすすむという決意から、現役社員間の話し合いで会社のビジョンを練り直しましたのでここに紹介します。新ビジョンのコンセプトは、過去にとらわれず、われわれの強みと将来の社会像を念頭に簡潔明快に次の 3 つの柱の構想にまとめて表現しました。

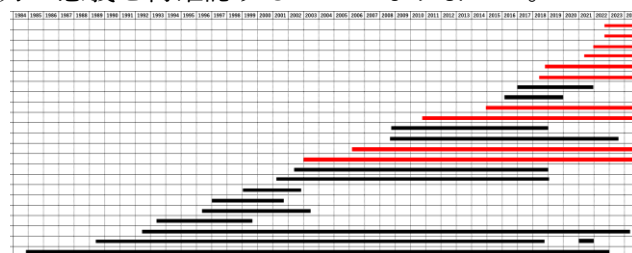
一番目の柱は、「**社員間の自由闊達な議論と交流を尊重し、少数精鋭の技術者集団として研鑽をつづけます**」です。国際耕種は、規模の拡大を問わず、少人数のメリットを生かした社内環境づくりを続けてゆきます。われわれは各々を「砥石」と見立て、社員相互が技術・知識を研鑽し続けていくことを新ビジョンのベースとしました。

二番目の柱は、「**世界各地の住民との協働にもとづく適正技術の開発・普及を通し、農村の持続的な繁栄に貢献します**」となります。これは、創業から国際耕種の社員が一貫して目指してきたことでありますが、国内の大学での学業・修練や現場で培った経験・知見に基づいて、途上国等の各プロジェクト現場で農家や農村女性の生計向上や住民の環境保全に貢献していくことです。そして、われわれなりのこだわりでの上質なコンサルティング、ないしサービスの提供をイメージしています。

三番目の柱として、「**海外の現場で得られた経験と知見を日本の地方や地域社会に還元し、その活性化に貢献します**」を掲げました。これは、二番目の「国内でえられた経験や知見を海外に」の流れから、その「海外でえられた経験や知見を国内に」持ちかえり、将来の日本社会に対して貢献

していくという、意志の現れであります。国際耕種の構成員となり一定期間在籍するなかから、個々の技量が研ぎ澄まされ、海外を目指して世界各地の現場で活動する。そして最終的には日本に回帰してこんどはその経験・知見の国内の地域活動等に貢献する。このような国際耕種のメンバーの成長過程をライフヒストリーとして円環するイメージの新ビジョンとしました。

今回の 40 周年記念報告・懇談会における同門の仲間たちとの語らい、そしてそれぞれの現時点における活動紹介は国際耕種の新ビジョンとともに各個人の所在地や到達点を確認する絶好の機会となりました。なにより現役引退後の OB の国内各現場での活躍に学ぶことは、われわれ現役の将来の姿にも映りましたし、海外で従事する国際協力の意義を再確認することになりました。



国際耕種の全社員リストと在籍期間（赤が現役）。なんとなく樹木が成長するさまにもみえる。さて 10 年後にはどのような樹形になっているか？

会社とは何であろうか？各社員の個性や人間性、知的訓練の背景、世代による経験の積み方の違いはどうぜん異なるものであるし、時代の変遷による社会ニーズの変化もある。こうしたなか国際耕種は、生命体の細胞内物質が新陳代謝するがごとくその構成員を置きかえてきました。また国際耕種は、乾燥地を目指した同好会的なホモ（同質）集団から、多様な価値観のヘテロ（異質）集団へと変貌してきた側面もあります。では、国際耕種が組織 DNA として連綿と引き継いでいくものと、積極的に変えていくものとが何であるのか？われわれは新ビジョンを掲げつつ、上記の問いを問いながら、日々新たなことに挑戦していきたいと考えています。